

二世世代交流もちつき大会

12月13日（土）、松前町西公

民館主催の三世世代交流もちつき大会が行われました。前日から婦人会の方々が90キログラムの餅米洗い、あんこ作りなどの準備を手際よく進めてくださいました。

当日は、好天に恵まれ、絶好の餅つき日和となりました。今回初参加のいきいきまきさきっこボランティアセンターの子どもたちや松前っ子道中の参加者、囲碁クラブの皆さま



▲あんこを前に少し緊張ぎみの子どもたち



▲上手にお餅はもめるかな？



▲心をひとつにべったんこ

んなど子どもから大人まで総勢130名が、餅米を蒸す、つく、餅を切る、もむ、運ぶ、並べるなどの作業に協力、挑戦しました。

高齢者の方々の小づき、手あし、餅つき、婦人会の方々の餅とり、餅もみ、どれをとってみても見事なもので、見られるほどの手さばきでした。力のある元気な大人も足元にもおよびません。

約3時間の餅つき大会は、協力、活気、友愛、喜びのう

ちに終了しました。後片付けも婦人会や高齢者の方々や子どもたちが分担して、手早く済ませてくださいました。

子どもたちは、ごほうびにつきたてのお餅を胸に、満足しきった笑顔で家路に急ぎました。

これも毎年のことながら、高齢者や婦人会の方々の献身的な奉仕のたまものと感謝申し上げます。

「世界がもし一〇〇人の村だったら」から感じたメッセージ

岡田小学校 土居 宣子

「世界には六三億人の人がいますが、もしもそれを一〇〇人の村に縮めると、どうなるでしょう。」

というクイズのような書き出しで始まるこの本は、一昨年に発行された「世界がもし一〇〇人の村だったら」という本です。

「村人のうち一人が大学の教育を受け、二人がコンピューターをもっています。けれど、一四人は文字が読めません。」

これは、衝撃的な事実です。文字が読めない。即ち学校教育を受けていないということ。戦争や差別、生活上の理由などいろいろな原因が考えられます。しかし、日本で生活していると、ピンとこない事実かもしれません。つまり、見ようとしないと見えないう現実がそこにあるということです。同和問題も同じだと思います。一見、なくなっているように見えます。が、それは、見ようとしなければ見えないということ。たとえば、入院中に、住んで

いる場所を知られた途端に同室の人たちから口をきいても、ええなくなつたおじいちゃん。結婚どころか、好きな人とつき合うだけで、相手の家族の言動にびくびくしなければならぬ若者の話。差別は、遠い昔の話ではなく、外国の話でもないのです。すぐそばで起こっているのです。

では、私たちは、どうすればいいのでしょうか。まず、家族と同和問題について語っていくことが大切だと思います。たとえば、子どもが、算数の計算をまちがえていたり、漢字をまちがえて読んだりしたら、正しい答えを教えるでしょう。そのうち直ると放っておいたりはいらないと思います。子どものときの認識がその後、とても重要になることはだれもが知っているはず。人権問題・同和問題も同じです。子どもたちに正しいことを伝えていくのは、私たち大人の務めだと思います。

（出典）「世界がもし一〇〇人の村だったら」出版社マガジンハウス